

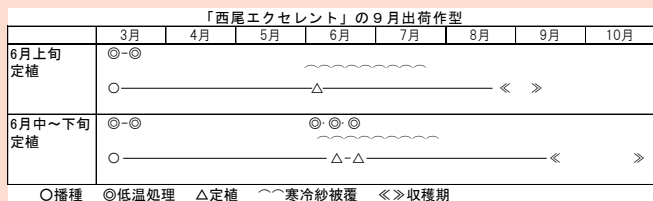
- 「博多シンテッポウユリ」のブランドで生産販売が行われているが、出荷時期が7～8月に集中するため、労力も集中し、**規模及び面積の拡大が課題となっている。**
- このため、9月以降出荷の「**新たな作型**」の導入を提案し、**栽培マニュアル作成等の技術支援を実施**、規模及び栽培面積の拡大を図った。
- その結果、9月出荷作型での栽培面積が増加するとともに作型分散によってシンテッポウユリ全体の栽培面積が取り組み前と同程度まで回復した。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 栽培マニュアルの作成

- 9月出荷作型の育苗技術を確立
- 9月出荷作型の安定生産・出荷に貢献

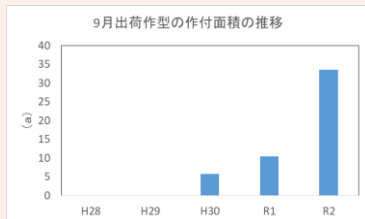


平成30年～令和元年

- 新品種・新技術の確立支援事業を活用し、農業革新支援専門員を中心に普及指導センター、農林業総合試験場、JA全農ふくれんでプロジェクトチームを結成。市場や実需者との協力関係を構築し、育苗から販売までの体制づくりを行った。

2 9月以降の出荷作型の面積が増加

- (H28→R2)
- ① 作付面積  
0a → 33.6a

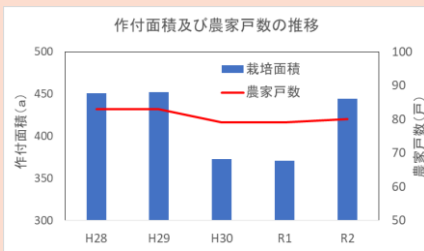


平成30年

- 農林業総合試験場で育苗に関する試験を実施するとともに、県内4か所に9月以降の作型での実証展示ほを設置。育苗技術の確立と共に現地での作型適応性を検討した。

3 作付面積の回復

- (H28→R2)
- ① 作付面積  
451 → 444a
- ② 生産者数  
83名 → 81名
- ③ 規模が拡大  
5.4 → 5.6a/戸
- ④ 出荷時期が分散  
最大出荷量(ピーク)は減少



令和元年

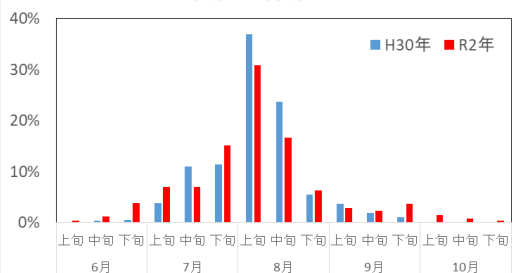
- 9月出荷及び施設での12月出荷に作型を絞り、現地での実証展示ほを設置。実需者の評価を確認し、優良な結果を得られた9月出荷作型において栽培マニュアルを作成。

普及指導員だからできたこと

- ・ 日頃の意識をもった活動から、集中した労力の解消等、今回の課題の設定至った。また、**周知に効果的な実証展示ほの設置**ができ、現地での普及につながった。

- ・ コーディネート機能を活かし、試験研究機関やJA、市場等の関係機関との連携によって**早期に技術が確立され、現地への普及へつながった。**

時期別出荷期計画



## 作期拡大によるシンテッポウユリの振興

活動期間：平成30～令和元年度

### 1. 取組の背景（平成28～29年頃の状況）

本県のシンテッポウユリは、平坦地から中山間地まで県内各地域で生産され、夏季の業務用（冠婚葬祭向け）やパック商材（一般消費者向け）として、地元市場を中心に関東関西市場に出荷されている。

本県では、6～9月出荷作型を栽培・出荷している。9月出荷の作型については、晩生系の「西尾晩生」「雷山3号」を5月中下旬定植し、8月下旬から収穫しているが、定植直後の高温遭遇によるロゼットで、抽だい率が低く、安定的な生産・出荷が望めない。

このため、栽培が容易な7～8月の作型に集中し、出荷時期の偏りが大きく労力の確保が問題となっており、高齢化等により労力も低下してきているため、出荷量の減少が懸念されていた。

一方、実需者からは9月以降の出荷ニーズが増加していた。

このため、9月出荷作型の安定生産及び10月以降の出荷が可能な品種を導入するとともに、定植後の高温によるロゼットを回避する新たな育苗技術を導入し、シンテッポウユリの出荷期を拡大することで農家の規模の維持拡大、産地の維持を図った。

### 2. 活動内容（詳細）

新品種・新技術の確立支援事業（平成30年度～令和元年度）を活用し、経営技術支援課農業革新支援専門員が中心に、産地がある福岡、朝倉、久留米、飯塚、八女、京築の6普及指導センター、農林業総合試験場と園芸振興課、JA全農ふくれんでプロジェクトチームを結成。JA、生産者、実需者（花市場及び仲卸）との連携を図り、事業への取組、生産の振興を図った。

#### ■平成30年度

農林業総合試験場（以下農林総試）で育苗に関する試験を実施するとともに、県内4か所で実証展示ほを設置した。

農林総試では、播種時期や育苗時の冷房育苗に関する試験、9月以降の出荷に導入が可能と思われる品種「西尾エクセレント」の抽だい、開花に関する品種特性調査を実施した。JA全農ふくれん種苗センターで育苗した苗を県内の展示ほに配布し、6～9月に定植を行う作型での実証を行った。その結果、6月上旬定植及び6月中下旬の定植で9月出荷及び9～10月にかけての出荷が可能であること、定植後のかん水量が抽だいに影響することが明らかになった。

- ・プロジェクト検討会（2回）
- ・実証ほ現地検討会（2回）
- ・実証ほの設計・成績検討会の開催（2回）
- ・先進地事例調査（1回）

■令和元年度

前年度の結果から、9月出荷及び12月出荷の作型で、県内5か所に展示ほを設置。また、JA等の協力を得て市場調査を行った。12月出荷の優良であった展示ほの事例を取りまとめ、「西尾エクセレント」における9月出荷シンテッポウユリ栽培マニュアルを作成した。

- ・プロジェクト検討会（2回）
- ・実証ほ現地検討会（2回）
- ・実証ほの設計・成績検討会の開催（2回）
- ・市場調査（1回）

3. 具体的な成果（詳細）

■栽培マニュアルの作成

低温要求量が少なく、高温期に定植する作型でもロゼットになりにくい品種「西尾エクセレント」を用い、種子冷蔵及び苗冷蔵の技術を確認し、6月定植による9月出荷及び9～10月出荷の作型の確立に至った。マニュアルでは、「西尾エクセレント」の品種特性のほか、作型、種子冷蔵、育苗管理、苗冷蔵など管理に沿った内容を取りまとめており、9月出荷の作型を新規で栽培する農家でもわかりやすいように掲載した。

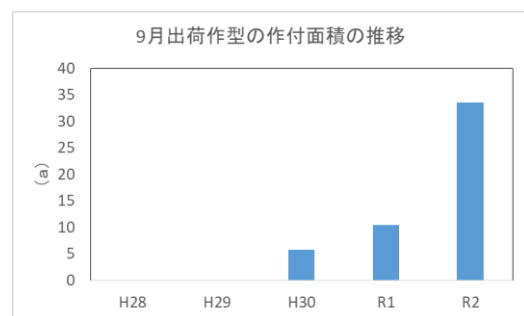
「西尾エクセレント」の9月出荷作型

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
6月上旬定植	◎-◎			〇-----△-----	~~~~~			《》
6月中～下旬定植	◎-◎			◎・◎・◎	~~~~~			《》

○播種 ◎低温処理 △定植 ~~~寒冷紗被覆 《》収穫期

■9月以降の出荷作型の増加

取り組みを始めた平成30年以降、9月以降の出荷作型は増加し、令和元年に栽培マニュアルを作成したのちの令和2年には、33.6aまで拡大した。



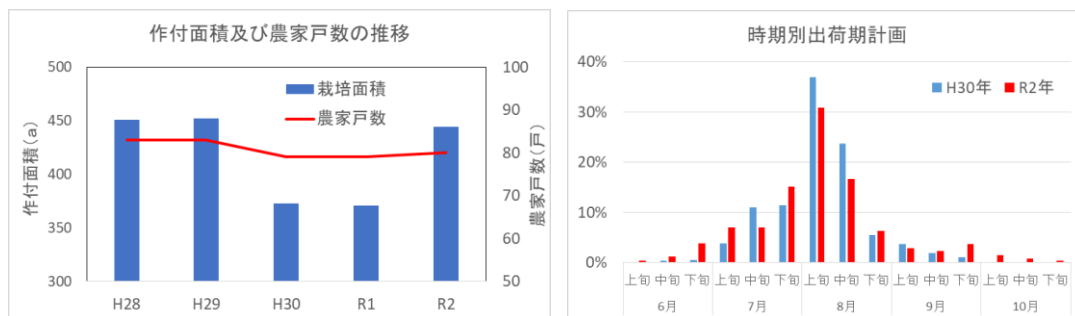
■作付面積の回復

出荷量の減少が懸念され、取り組みを始めた平成30年には作付面積が373aまで減少したが、栽培技術が確立し、栽培マニュアルを作成以降の令和2年には、面積減少以前の平成29年と同等の444aまで回復した。

回復した背景には、シンテッポウユリは花きの中では重量のある品目で、作業負荷が高い。出荷時期も集中するため、高齢化等によって労働負荷に耐えられず作付面積を減少させてきた経緯がある。

9月出荷の作型で安定生産ができるようになったことから、作型が分散する

ことによって、労働負荷も分散され、生産規模も回復できた。



#### 4. 農家等からの評価・コメント (N氏)

収益が計算できる出荷時期が限られていたため、作型が広がったことは大きい。パッケージセンターの利用で規模を拡大してきたが、パッケージセンターを継続した取り組みにするためにも、出荷期間を長く、安定した出荷が求められていた。9月以降は、台風などの気象災害も心配ではあるが、徐々に作期と規模の拡大を行っていききたい。

#### 5. 普及指導員のコメント (八女普及指導センター・花き係)

当センター管内でも、実証展示ほを設置し、農家の評価を受けながら技術の改善、生産拡大の推進を図ってきました。展示ほの設置によって、周辺の農家も興味を持ち新たな栽培希望者も現れました。この取り組みを通じ、シンテッポウユリの特性もわかってきたことから、地元JAの協力を得ながら、出荷予測等の新たな取り組みも始まりました。今後は9月出荷の高品質安定生産をすすめ、作型を分散することで規模の拡大、収益性の確保、労働負荷の軽減等を図り、産地の維持・発展を行います。

#### 6. 現状・今後の展開等

プロジェクトチームは解散したが、各地域において生産振興が図られている。中でも主力産地である八女地域においては、パッケージセンターのさらなる活用や安定販売のため、出荷時期の予測に関する取り組みも始まった。



9月：出荷直前のシンテッポウユリ